イスラエル

世界の未来

ja

イスラエルと世界の未来

今日、人類が急速に変化する世界に生きていることは誰の目にも明らかである。1914年以前のヨーロッパの強力な世襲支配王家のほとんどは他の形態の政府に取って代わられ、地球上の人口の大部分は様々な独裁体制の支配下に置かれている。第一次世界大戦の勃発から始まったこの時代は、世界各国の政府が全般的に衰退し分断される時期であった。しかし、全くそうとは言い切れない。なぜなら、この同じ時期に多くの新国家が誕生したからだ。

その一つがイスラエルである。おそらく、イスラエルが「再誕生」したと言う方が正確だろう。この民はかつて独自の政府を持つ国家であったからだ。しかし古代イスラエル国家は、その統治が神の導きの下で機能した点において、過去現在を問わず地球上のいかなる民族にも見られない特異性を有していた。聖書ではイスラエルの王たちは「主の御座」に就くと記されている（歴代誌第一29:23

）。イスラエル最後の王はゼデキヤであった（エゼキエル書21:25-27）。紀元前606年、ゼデキヤはネブカドネザル王によって廃位され、国民全体がバビロンへ捕囚として連行された。この捕囚は70年間

続いた。その間、バビロンはメディアとペルシャに征服され、ペルシャのキュロス王が解放の勅令を発布し、イスラエル人が故郷へ帰還することを許可した。ただし、自らの政府を再建することは認められなかった。

　それ以来、イスラエルは従属民族として、その地を支配するいかなる国家にも属国として従属し続けた。イエスの時代にはローマ帝国がそれにあたる。紀元69年から73年にかけて、ローマ軍司令官ティトゥスがエルサレムを包囲し、ついに破壊した。この恐るべき試練で滅ぼされなかったイスラエル人は、世界中に散らされた。この状況は数世紀にわたり現在まで続き、ユダヤ民族によって「離散の時代」と呼ばれている。

離散の予言

　イスラエルの律法者モーセは、イスラエル人が諸国に散らされることと、過去1世紀に我々が目撃したように彼らが再び集められることを予言した。この予言は申命記29章24節および30章1-6節に記録されている。預言の後半にはこう記されている。「主なるあなたの神は、あなたを先祖の土地に帰らせ、再びその地を所有させる。そして主は、あなたを先祖よりもさらに繁栄させ、子孫を増やす。主なるあなたの神は、あなたとあなたの子孫の心を改めさせ

、心を尽くし、魂を尽くして主を愛し、生きるようにする」。

モーセはまた、イスラエルが独立を失い散らされる時代の長さも予言した。これまで見てきたように、イスラエルは神の下にある国民であり、このゆえに過ちに対する懲罰の対象となった。モーセは彼らが受ける特定の矯正的罰に言及し、続けてこう付け加えた。「それでもなお、あなたがたがわたしに聞き従わないなら、わたしはあなたがたの罪のために七倍の罰を下す。」（レビ記26:18）

この「七倍」の罰に関する警告は四度繰り返される。預言研究者はこれが時間単位であると信じる。聖書が示す象徴的な「時」は360年であり、七倍すれば2,520年となる。この計算方法の聖書的根拠はエゼキエル書4章4-6節に記されている。モーセの預言が最終的な罰であることを示している以上、紀元前606年に最後の王ゼデキヤが倒され国家の独立を失った時点から始まったと結論付けるのが合理的だと我々は考える。

紀元前606年から2,520年を数えると、西暦1914年に到達する。まさにその時、第一次世界大戦が勃発した。この戦争の結果、アレンビー将軍率いるイギリス軍によるエルサレム及びパレスチナ地域からのトルコ軍駆逐、有名なバルフォア宣言、そしてあらゆる国々からのユダヤ人難民・開拓者への古代の

故郷の門戸開放がもたらされた。これによりシオニズム運動は新たな活力と希望を注入されたのである。

　様々な一時的な挫折はあったものの、ユダヤ人による地域の復興と古代の故郷への移住は継続した。こうして1948年、新たな国家イスラエルが誕生したのである。このように見ると、聖書と歴史に刻まれたこの民族の国家独立へと至る一連の出来事は、2,520年を経た1914年に始まったと言える。

異邦人の時代

　1914年以降のイスラエル解放の真の意味は、現代の主要なユダヤ人指導者たちから卓越した教師かつ預言者と認められているイエスの予言に注目することで、より明確に理解できる。弟子たちが現世の終わりについて尋ねた際、イエスはこう答えた。「エルサレムは異邦人に踏み荒らされる。異邦人の時代が終わるまで」　（ルカ21:24）。この預言が語られた当時、象徴的に「エルサレム」と呼ばれたユダヤ民族は異邦人によって「踏みつけ」られており、この状態は「異邦人の時代」が成就するまで続くはずだった。

　紀元前606年にイスラエル最後の王が倒されたのと時を同じくして、預言者ダニエルはバビロンの王に与えられた主の預言的な夢を解き明かし、バビロ

ンを起点とする四つの世界大国の興亡を予告した。第二はメディア・ペルシャ、第三はギリシャ、第四はローマである。像の足の指は、1914年以前のヨーロッパ諸国へのローマ帝国の分裂を示していた。ダニエル書2:31-45

ダニエルはネブカドネツァル王に言った。「天の神はあなたに王国と力と強さと栄光をお与えになりました。」（37節）。これはネブカドネザルがイスラエルの王たちのように主の王座に座ったという意味ではない。単に、バビロンを起点として、異邦人による地上の支配が神によって妨げられることはなく、その支配は神の民であるイスラエル人さえも及ぶことを示したのである。

しかし、この状態は永遠に続くものではなかった。ダニエルの預言は、ローマ帝国の分裂時代が終わるまで——像の足の指に象徴される「これらの王たちの時代」——に過ぎないと指摘している（44節）。その後、天の神は「永遠に存続する」王国、すなわち政府を設立される。これは長く約束されてきたメシアの王国を指している。

イエスが「異邦人の時代」と呼んだ期間は、イスラエルが国家の独立を失った「七つの時」と同期している。これは異邦人の時代もまた、1914年に預言的な終結を迎えたことを意味する。聖書の時間に関する預言は、その完成ではなく、関連する出来事の

小さな始まりを示すものである。1914年に始まった第一次世界大戦は、分裂した旧ローマ帝国の残党が完全に没落する始まりを告げた。また、イスラエルの国家主権獲得にもつながった。

今日のイスラエル国家は自由な国である。もはやイスラエル人は自らの政府を持たない状態ではない。イスラエルは世界の諸国の一つであり、もはやローマや他の異邦の勢力への属国ではない。600万人以上のユダヤ人を擁し、アジアで3番目に高い生活水準を誇る。多くの分野で世界をリードする国の一つである。イスラエル国家は困難を伴わないわけではない。1948年以降、自由を守るために幾度かの戦争を経験してきた。それにもかかわらず、イスラエルは自由な国であり続け、さらに強大化し、今や世界有数の強国と見なされるまでに至った。この状況をもたらした出来事は、モーセが予言した「七つの時」の終わりに始まった。

介入した出来事

諸国の中で自由へと向かう過程におけるイスラエル民族の重要な経験の多くも、聖書に予言されている。これを表す預言的表現の一つが、神が彼らの「捕囚」を「再びもたらす」というものだ。この表現はヨエル書3章1-2節に見られ、主はこう言われる。「その日、その時に、わたしがユダとエルサレムの捕囚を再び連れ戻すとき、わたしはまたすべての国

々を集め、彼らをヨシャファトの谷に下らせ、そこでわたしの民、わたしの嗣業であるイスラエルのために、彼らと争う。彼らはイスラエルを諸国の間に散らし、わたしの地を分けたからである。」 この聖句における「捕囚」という言葉は、ストロング聖書索引によれば「かつての繁栄の状態」を意味することに留意することが重要である。

本章9-14節では異邦諸国の戦いを目的とした集結が予告され、「ヨシャファトの谷」は「裁きの谷」と表現される。この諸国の集結において、象徴的に「鋤を剣に」「刈り込み鋏を槍に」打ち直す戦争準備が示されている。この動きは1914年から始まった時代に現れており、預言は主がご自身の民の「捕囚」、すなわちかつての繁栄を「再びもたらす」時期がまさにこの時代であることを示している。実際、この期間におけるイスラエルの成功と相対的な繁栄こそが、多くの国々を彼らに対して結集させる原因となったのである。

同様に印象的なのは、主がご自身の民とその土地に関して「諸国と争いを起こす」という預言である（エレミヤ25:31）。ヨエル書3章2節は、土地の分割について言及している。これもまた現実となった。異邦の諸国はバルフォア宣言に盛り込まれた約束を果たさず、神が約束された土地の半分以下にイスラエルを制限することで紛争を解決したからだ。イスラエルはその後、この土地の一部を取り戻したも

のの、神が与えた土地のほんの一部にしか支配権を持っていない。創世記13:14,15

「恐れ」であって「平安」ではない

　他の預言もまた、イスラエルの再集結の時期が多くの困難に満ちていることを明らかにしている。エレミヤはこう記した。「主は言われる。見よ、その日が来る。わたしはわが民イスラエルとユダの捕囚を帰らせる。…わたしは彼らを、わたしが彼らの先祖に与えた地に帰らせ、彼らはそれを所有する。…主はこう言われる。我々は震えおののく声、恐れ、平安ではない声を聞いた。…ああ、その日は大いなる日、これに並ぶものはない。それはヤコブの苦難の時である。しかし彼はそこから救い出される。」エレミヤ書30:3-7

　この預言の意味は明らかである。それは、この歴史的な民が自らの地へ回復される時が来てもなお、彼らは恐れと震えを経験するであろうこと――すなわち、彼らにとって即座に平和と幸福の時となるわけではないことを強調している。

　まず第一に、　バルフォア宣言とその後の国際連盟委任統治による実施に、ユダヤ人側は大きな歓喜を示した。この委任統治は、イスラエル人に約束の地における故郷を保証することを約束した。非常に

明確な形で、彼らの長い捕囚からの帰還の始まりが訪れたのである。

しかし間もなく、ドイツ、オーストリア、ポーランドのユダヤ人はヒトラー政権による苛烈な迫害に晒された。その迫害は激しさを増し、第二次世界大戦中も継続した。この戦争では想像を絶するホロコーストが発生し、600万人のユダヤ人が殺害され、無数の者が家を失った。

一方、アラブ諸国の反対により、約束の地への移民の門は閉ざされた。この苦しむ民がかつてないほど祖国を必要としたまさにその時、門は閉ざされたのである。彼らが聞いたのは、確かに「震えと恐怖の声」であって、平和の声ではなかった。

同じ異常な状況の組み合わせを広く証言する別の預言はこう記す。「主はこう言われる。やがて来る日が来る。その日にはもはや『イスラエル人をエジプトから導き出された主が生きておられるように』とは言われず、『イスラエル人を北の国と、主が彼らを追放したすべての国々から導き出された主が生きておられるように』と言われる。わたしは彼らを、先祖に与えた地に帰らせる。しかし今、わたしは多くの漁師を遣わす」と主は言われる。「彼らは彼らを捕らえる。その後、わたしは多くの狩人を遣わす。彼らは彼らを狩る。」エレミヤ書16:14-16

この預言は、イスラエル人が故郷に帰る時が来ると、彼らを帰還させるための働きかけがなされることを示している。主は「漁師」を遣わして「彼らを捕らえる」と宣言された。これは1896年に故テオドール・ヘルツルによって設立されたシオニスト組織によって成就されたと言えるだろう。漁師は餌で魚を誘うように、シオニスト組織は長年にわたり、ユダヤ人が故郷の地へ移住すべき理由と、移住によって得られる利点を示してきた。

しかしこの手法で約束の地へ誘われたイスラエル人は多くはなかった。とはいえ現代イスラエルではヘルツルは高く評価されている。同地で感動的な光景の一つがヘルツルを称える記念庭園だ。彼の墓へ続く石の歩道はユダヤ国家の段階的な進展を象徴している。ヘルツルの功績は無駄ではなかった。

預言はまた「主は狩人を遣わし、彼らが彼らを狩る」とも述べている。ここにはより強硬な手段が示唆されている。その中には、ホロコーストにおけるヒトラーによる苛烈な迫害が間違いなく含まれる。この迫害は激しさを増し、殺されなかったヨーロッパのユダヤ人のほとんどが故郷を渇望し、機会があればそこへ帰還することを切望するに至った。

この流れに沿って極めて核心を突く別の預言はこう記す：「わたしは生きている、と主なる神は言われる。わたしは力強い手と伸ばした腕と注がれた怒

りとをもって、あなたがたを治める。わたしは力強い手と伸ばした腕と注がれた怒りとをもって、あなたがたを諸国民の中から連れ出し、あなたがたが散らされている国々から集める。そして、わたしはあなたがたを諸国民の荒野へ連れ出す。」エゼキエル書20:33-35

1914年以降、イスラエル人が居住していた様々な国々から移住し、約束の地で新たな住まいを築こうとする努力に関連して、多くの「怒り」が現れてきた。予言通り、そこに住む者たちでさえ「諸国民の荒野」にいる。すなわち、人類史におけるこの混沌とした時代の苦難と不確実性を、地上のすべての人々と分かち合っているという意味である。彼らはまだ平和と安全を見出していない。

剣から救い出された

エゼキエルの預言第38章には、イスラエルに将来訪れる状況の概要が描かれている。民は「剣から救い出された」者として、平和のうちに、あるいは確信を持って安全に住んでいると描写されている（8節）。今日のイスラエルは、世界の諸国の一つとして、現在の地位の多くを戦争と軍事的紛争の中で獲得し、今もなお戦争の脅威に満ちたこの世界で安全を軍事力に依存している。

エゼキエルの預言は、彼らが地に戻った後のいつかの時点で、「北」から「ゴグ」という象徴的な人物が率いる攻撃的な軍隊がマゴグの地からイスラエル人に対して攻撃を仕掛け、彼らの滅亡を脅かすことを明らかにしている。預言は、これが起こった時、神が御自身の民のために介入し、敵から彼らを救い出すことを示している。この救いは、主によるものであることが極めて顕著に示されるため、主の名が「多くの国々の目の前で知られる」結果をもたらす。エゼキエル38:2,14-23

。このように神が彼らを守られたことを通じて、イスラエル人は約束の地への帰還が神の摂理によって成し遂げられたことを悟るようになる。主はこう予告された。「こうしてわたしは、わたしの聖なる名を、わたしの民イスラエルのただ中に知らせる」（エゼキエル39:7）。この時から、イスラエル人は自らの事柄において神の導きを仰ぎ、世界全体は神が民を救い、メシアが彼らを治めていることを知るようになる。

新たな王

イスラエル最後の王ゼデキヤが倒された時、主はこう言われた。「冠を取り除け、王冠を脱がせよ。かつてのようになることはない。卑しい者は高められ、高い者は低くされる。わたしはこれをひっくり返し、ひっくり返し、ひっくり返す。その冠は、正

当な所有者が来るまで回復されない。わたしはそれを彼に与える」（エゼキエル21:25-27）。「正当な所有者」とは、ゼデキヤの打倒後にダビデの王座に就くイスラエルのメシアである。

イザヤはメシアの誕生と、イスラエル及び世界への統治権獲得を預言した。「見よ、子どもが私たちに生まれ、私たちに与えられた。その肩に統治が置かれる。その名は『驚くべき助言者、力ある神、永遠の父、平和の君』と呼ばれる。その統治と平和は終わりなく、その正義と公平はダビデの王座の上で永遠に続く。万軍の主の熱意がこれを成し遂げる！」（イザヤ書9:6-7）。イザヤ書9:6,7

さらにメシアについて預言して、イザヤはこう記した。「王は正義をもって治め、君たちは公正をもって統治する。すると、荒れ野に裁きが宿り、肥沃な地に正義が留まる。正義の業は平和となり、正義の結果は永遠の静けさと確かな安らぎとなる。わたしの民は安らかな住まい、確かな住処、静かな休息の地に住む。」 イザヤ書32:1,16-18

イスラエル全体

もしこれらの祝福が、メシアが統治を確立する時に生きている者たち、あるいはその時から後に生まれる者たちだけに限定されるならば、イスラエルと世界が享受する未来の祝福についての私たちの理解

は、聖書に示された栄光に満ちた現実には遠く及ばないでしょう。神の約束はイスラエル全体、あらゆる世代のイスラエル人に与えられたものです。その約束には、テオドール・ヘルツルも含まれている。彼と、イスラエルが自らの土地に回復されることを願い、そのために労苦した何千もの同胞のシオニストたちも同様である。たとえ彼らが今や死の中で眠っているとしても。

離散の長い数百年の間、異邦人への隷属からイスラエルが解放されることを切望し祈り続けた、熱心で神を畏れるユダヤ人たちがいた。エルサレムの嘆きの壁は、神が今も彼らを愛し、やがて救い出してくれるという何らかの証拠を待ちながら、落胆したイスラエル人が絶望の中で耐え忍んだ苦悩を鮮明に物語っている。しかし彼らもまた、今や皆、死の眠りについている。

離散以前でさえ、イスラエルの運命は常に幸福なものではなかった。国家がある程度の繁栄と平和を享受した時代もあれば、戦争によって血を流し、抑圧された時代もあった。しかし、神のメシア的祝福の約束はこれらの人々にも向けられていた。それでも彼らは、その約束が成就する兆しを見ることなく死んでいった。

モーセは当時のイスラエルの民にこう告げた。「主なるあなたの神は、あなたのために、あなたと同

じイスラエル人の中から、わたしのような預言者を起こされる。あなたは彼に聞き従わなければならない」（申命記18:15）。これは来るべきメシアに関するもう一つの約束である。しかし、この約束を聞いた者たちは皆死んだ。それでも、この約束や他のメシア的約束は彼らに、そしてイスラエルの民のあらゆる世代に成就する。なぜなら彼らは死者の中からよみがえるからだ。

これを確証する多くの約束がある。詩篇の作者が記したように、モーセはイスラエルの神への祈りでこう言った。「あなたは人を塵に帰らせ、『塵よ、帰れ』と言われる」（詩篇90:10）。主は預言者ダニエルに「地の塵に眠る者は目覚める」（ダニエル書12:4）と言われた。すべてのイスラエル人の命の回復が約束されているのだ。（詩篇90:3）。主は預言者ダニエルに「地の塵の中で眠る者たちは目覚める」と告げられた（ダニエル12:2）。エゼキエル16:55には、すべてのイスラエル人の命の回復が約束されている。子どもたちが死から目覚めるという約束はエレミヤ31:15-17に記されている。

メシアの王国の時期について、預言者イザヤはこう記している。「それゆえ、アブラハムを贖われた主は、ヤコブの子孫にこう言われる。もはやヤコブは恥じることなく、もはや彼らの顔は青ざめることはない。彼らが自分たちのうちにいる子ら、すなわちわたしの手のわざを見る時、彼らはわたしの名を

聖と認め、ヤコブの聖なる方の聖さを認め、イスラエルの神を畏れるようになる。心迷う者は悟りを得、不平を言う者は教えを受け入れる。」イザヤ書29:22-24

堕ちて死に向かう人類の他の者たちと同様、ヤコブも病と老いによって顔色を失い、ついに息を引き取った。しかしイザヤの預言によれば、彼は命を回復し、現在の時代に至るまでのあらゆる世代の「子ら」を目にするであろう。その時、彼の顔は「青ざめる」ことはない。なぜなら、それはヤコブとすべてのイスラエル人、そして全世界の人類にとって、約束された健康と永遠の命、そして平和と安全の時となるからだ。

イスラエルの未来の君主たち

既に引用したメシアに関する預言の中で、イザヤはこう予告した。「王は正義をもって治め、君主たちは公正をもって統治する。」（イザヤ書32:1）。詩篇の作者は、イスラエルの「父祖たち」が「全地の君主となる」と預言した（詩篇45:16）。主はこう告げられた。「わたしはあなたの裁判官たちを初めのように、あなたの助言者たちを創世の如くに回復する。その後、あなたは『正義の都、誠実なる都』と呼ばれるであろう」イザヤ書1:26

この最後の預言において、イスラエル人は神が彼らを治めてこられた様々な方法を思い起こさせられる。まず、モーセの指導のもとには、その補佐役である「助言者」たちがいた。次に、450年にわたる審判者による統治の時代が続いた。その後、王の時代が訪れた。ダビデはエルサレムに政府を樹立し、そこが彼らの首都と見なされた。メシアの統治においては、王——すなわちメシア——を代表する者たちが、助言者や裁判官に相当する存在となる。これら全てが、今後イスラエルの「正義の都、誠実な都」となるのである。

メシアを代表するイスラエルの「君主」として仕える者たちは、各世代から選ばれた古代の忠実な者たちであり、彼らに託されるこの高い信頼に値することを証明した者たちである。もちろん、その中でも傑出しているのは、かつての義なる指導者たちや預言者たち——彼らの「父たち」である。彼らはメシアを代表するにふさわしい卓越した資格を持つ！民のために命を捧げた偉大な律法者モーセがいた。またバビロン捕囚のヘブライ人として宰相を務めたダニエルもいた。

ダニエルへの最後のメッセージで主はこう言われた。「あなたは、終わりの時まで歩み続けなさい。あなたは休む。そして終わりの日に、あなたは再び起き上がり、あなたに備えられた相続分を受け取るであろう。」（ダニエル12:13）。ここで言われる

「終わりの時」とは、神の民に対する長い迫害の終焉を指す。ダニエルは命を回復され、その地位に立つと約束されている。それは間違いなく、メシア的統治におけるイスラエルの君主の一人としての地位であろう。

詩篇の作者はこう預言した。「神は異邦（諸国）の上に君臨し、その聖なる御座に着かれる。民の君たちは集い、アブラハムの神の民は集う。地の盾は神のものであり、神は高く上げられる」（詩篇47:8,9）。さらにメシアの王国における民の「盾」すなわち守りについてこう記されている。「わたしの聖なる山（王国）では、誰も傷つけたり滅ぼしたりしない。主の知識が海を覆う水のように、地を満たすからである。」（イザヤ11:9

）イザヤは続ける。「その日、ダビデの王座を継ぐ者は全世界への救いの旗となる。諸国は彼のもとに集い、彼の安息の場所は栄光に満ちる。その日、主は再び御手を伸ばし、ご自身の民の残りの者――アッシリアに残る者、エジプトから、パトロスから、クシュから、エラムから、シナルから、ハマテから、海の島々から――を連れ戻す。主は諸国に旗を掲げ、イスラエルの追放者を集められる。地の果てからユダの散らされた民を集められる。」イザヤ書11:10-12

神が約束された地に今集められているイスラエル人の数は、主が最終的に回復される総数のごく一部

に過ぎない。聖書は確かに、メシアの統治が千年間続くと明らかにしている。その間、これまで見てきたように、今や死の捕らわれ人となっている者たちさえも、イスラエル人と異邦人の双方が、命に回復されるのです。確かに、イスラエルと世界の未来は、神の約束と同じく輝かしいものとなるでしょう！

新約聖書による確認

イエスに従う者たちにとって、新約聖書は旧約聖書（その最初の五書はユダヤ人の律法である）の説明であり、確認である。新約聖書はイエスを約束のメシア、ダビデの王座に着くべき方として提示する（ルカ1:31-33）。イエスは世界の贖い主として死なれましたが、神の力によって死からよみがえられました。これにより、死者をよみがえらせるという神のすべての約束に対する私たちの信仰が確証されたのです（使徒17:31

）。すべてのユダヤ人の根幹にあるのは、神がアブラハムに与えた約束です。すなわち、彼の子孫を通して「地上のすべての家族」が祝福されるという約束です（創世記12:3;　22:15-18）。新約聖書は、イエスこそがこの約束された「祝福の子孫」であると示している。パウロはこう記した。「約束はアブラハムとその子孫に対してなされた。子孫とは複数形ではなく、単数形で『あなたの子孫』と記されて

いる。それはキリストを指すのである。」ガラテヤ人への手紙3:16

新約聖書は、イエスがご自身の死によって世界に贖いを与えた後、単に死からよみがえられただけでなく、人間を超えた生命の次元に高められ、今や天使たちや宇宙の偉大な創造主と同様に、人間の目には見えない存在となられたと説明している。したがって、イエスは力あるが、目に見えない世界の支配者となられるのである。（コロサイ1:15；テモテへの手紙一1:17）

キリストの弟子たちへの手紙の中で、パウロはこう記している。「キリストにあってバプテスマを受けた者は、みなキリストを身にまとったのです。ユダヤ人もギリシャ人もなく、奴隷も自由人もなく、男も女もありません。あなたがたはみな、キリスト・イエスにあって一つなのです。もしあなたがたがキリストのものであるなら、あなたがたはアブラハムの子孫であり、約束による相続人なのです。」ガラテヤ人への手紙3:27-29

これは単に、真の、自己犠牲的なイエスの従順な者たちが、彼の霊的な王国に参与する特権をもって報いられ、彼と共に、アブラハムに約束されたように、地のすべての家族を祝福する働きに加わることを意味します。ヘブル人への手紙3:1-6において、使徒パウロは、モーセが自分の「家」に対して忠実

であったように、イエスもまた別の「家」に対して忠実であり、イエスの家にある者たちは「天の召命」の分かち合い者であると説明している。これは、彼らが目に見えない神の統治の家の一部となることを意味する。

ヘブル人への手紙第11章で、使徒パウロは両グループにさらに注目を促す。彼は多くの古代の忠実な者たちの名を挙げ、彼らが「より良い復活」に値する者となるために耐えた苦難のいくつかを概説する（35節）。これに加え、「私たち（霊的な家の者）なしには、彼らは完全にはなれない」と付け加える（40節）。したがって、古代の神の忠実な僕たちはまずメシアの王国で仕えるにふさわしい献身と価値を証明したが、死の眠りの中でアブラハムの霊的な「子孫」が完成するのを待たねばならず、その後「全地の君たち」としての働きを始めるために完全な命へと甦るのである。

地上の「子孫」は主にアブラハムの肉的な子孫で構成される一方、霊的な子孫はユダヤ人と異邦人の両方から成る。実際、この機会は当初イスラエルの民にのみ与えられ、彼らがイエスを拒んだ後、他の人々にも拡大されたのである。

メシアの王国においていかなる役職に就く者にも必須の資格は、主への心の献身、すなわち神の義の原則への忠誠であり、求められればそのために死を

も厭わない覚悟である。これは古代の偉人たちの共通特性であった。イエスに当てはまり、彼の忠実な追随者たちすべてに当てはまる。

王国の設立

聖書の教えを明確に理解するには、死者の復活に関する数多くの約束を考察し、信じる必要がある。もし私たちの信仰がこれらの約束を確信し、信じるならば、聖書は私たちに確信と慰めのメッセージをもたらす。これは特に、メシアの王国の設立とその働きに関する預言に関して真実である。

王国が現実となるためには、まずイエスが死者の中からよみがえる必要がありました。なぜなら、イエスこそがその王国の最高統治者となるからです。そして新約聖書が明らかにするように、王国の霊的な側面にイエスと共に参与する者たちもまた、死者の中からよみがえらなければなりません。イエスの時代から現在に至るまでの各世代において、そのような高い栄誉に値することを証明した人々がいました。このグループについて、こう記されている。「初めの復活にあずかる者は、幸いであり、聖なる者である。…彼らは神とキリストの祭司となり、千年の間、キリストとともに治める。」（黙示録20:6

）次に、すでに述べたように、神なるキリストの人間的代表者となる「古代の偉人たち」もまた、死

からよみがえる必要がある。イエスは彼らについてこう証言された。「まことに、あなたがたに告げます。東から西から、多くの人が来て、天の国でアブラハム、イサク、ヤコブと共に食卓に着くのです。」（マタイ8:11）。ルカの記述ではこれに「すべての預言者たち」が加わり、人々が北、南、東、西から来て、彼らを教師として「神の王国」で食卓に着くことが説明されている。ルカ13:28,29

王国の機能

このように、メシアの王国では、神によって任命された統治者――王――としてのメシアが君臨する。神の介入による保護という大いなる奇跡が起きる時に、自らの土地に再集結し生きているイスラエル人の世代が、このメシア的王国の統治体制のもとで祝福を受ける機会を最初に与えられる。新体制への忠誠を示す者たちは、従順の模範を示すことでその祝福を広げることに協力する。

これに関する預言はこう記す：「ユダの家よ、イスラエルの家よ、あなたがたが異邦人の間で呪いとなっていたように、 イスラエルの家よ。あなたがたが異邦人の間で呪いとなっていたように、わたしはあなたがたを救い、あなたがたは祝福となる。恐れるな。手を強くせよ。万軍の主はこう言われる。あなたがたの先祖がわたしを怒らせたとき、わたしは災いを下すことを決心し、憐れみを見せず、と万軍

の主は言われる。今、わたしはエルサレムとユダに再び善を行うことを決心した。恐れるな。あなたがたは次のことを行え。互いに真実を語り、法廷では正しく健全な裁きを行え。互いに悪を企てたり、偽りの誓いを愛したりしてはならない。わたしはこれらすべてを憎む、と主は言われる。」ゼカリヤ書8:13-17

ここに示された神の義の原則は、イスラエル人がメシアの祝福を受けるために守るべきものであるが、すべての国の民もまた、王国の祝福を受けるためにこれを守らねばならない。これに従う者は祝福され、また「地のすべての家族」にまで及ぶことになるこの偉大な祝福の計画に協力する特権を得るであろう。

神の御姿に

もう一つの尊い王国の約束はこう記す。「主はこう言われる。やがて、わたしはイスラエルとユダの民と新しい契約を結ぶ。それは、わたしが彼らの先祖と結んだ契約とは異なる。わたしは彼らをエジプトから導き出すために手を差し伸べたが、彼らはわたしとの契約を破った。わたしは彼らの夫であったのに、と主は言われる。その後に、わたしはイスラエルの家と結ぶ契約はこうである」と主は言われる。「わたしはわたしの律法を彼らの心に授け、彼らの思いに書き記す。わたしは彼らの神となり、彼ら

はわたしの民となる。もはや、彼らは隣人に教え、互いに『主を知れ』と言うことはない。小さな者から大きな者まで、皆がわたしを知るからである」と主は言われる。わたしは彼らの悪を赦し、彼らの罪を二度と思い出さない。」エレミヤ書31:31-34

この預言の核心は、神が御自身の律法を民の心に置き、その心に書き記すという約束である。これは神のかたちに造られた人間の状態を描写していると私たちは信じる。アダムはこのように創造され、神の約束は、メシアの王国という手段を通して、人間がこの完全な状態と神との交わりに回復されることである。

人間は当初創造された時、地を治める権威を与えられていた（創世記1:27,28）。この支配権も回復される。イエスはたとえ話の一つでこれを確証された。イエスは、あらゆる国々の民が裁かれる様子を描き、ある者は山羊のような性質を示し、他の者は羊のようになることを示されました。これらの羊に対してはこう言われるでしょう。「さあ、父なる神に祝福された者たちよ、世の初めからあなたがたのために備えられた王国を受け継ぎなさい。」マタイ25:34

このたとえを考察すると、人間に与えられた本来の支配権を受け継ぐために必要な性格的資質は、他者への利己的でない関心であることが示されています。利己主義は、堕落した人間の経験のあらゆる時

代を通じて、人類を蝕む害悪であった。メシアの王国の秩序のもとでは、愛が利己主義に取って代わる。その時、神がモーセを通して古代イスラエルに与えた律法の真の意味が認識され、全人類の生活の規範として受け入れられる。モーセはその律法に真の意味を与え、こう言った。「心を尽くし、魂を尽くし、力を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい」そして「あなたの隣人をあなた自身のように愛しなさい」と。申命記6:5、レビ記19:18

原罪から贖われ、完全な生命に回復されたすべての人々の生活の指針として、このような義の基準が掲げられるとき、この地はなんと輝かしい場所となるでしょう！神の基準に調和して、神の王国計画に積極的に応じる十分な時間を与えられた後、従順と協力を拒む者たちは、生きることを許されない。なぜなら、故意の罪に対する罰として死は残るからである。これは、回復された人類の幸福を損なうものは何もないことを意味する。使徒行伝3:22,23

多くの素晴らしいメシア的王国の約束は、まず第一にイスラエル人に与えられていますが、聖書はそれらがすべての国々の民にも成就することを保証しています。なぜなら、イスラエルは神によって世界の原型として用いられたからです。約束の地に戻されたイスラエル人は最初に祝福を享受する機会を得ますが、すべての人類が私たちの神の憐れみと愛に含まれているのです。

すべてのものの回復

神の預言者たちは皆、メシアの王国を通してユダヤ人と異邦人の双方に訪れる祝福を雄弁に予言した。新約聖書において使徒ペテロは、これらの預言が成就する時代を「万物の回復の時」と表現し、さらに「神は世界の初めから、聖なる預言者たちの口を通して語られた」と付け加えている（使徒言行録3:20,21）。

ペテロがこのようにメシアの王国の祝福に関する預言者たちの統一された証言の意味を要約した時、彼はユダヤ人聴衆に向けて語っていたため、こう付け加えた。「あなたがたは預言者たちの子孫であり、神があなたがたの先祖と結ばれた契約の子孫である。神はアブラハムに『あなたの子孫によって、地上のすべての民族が祝福を受ける』と言われたのである。」使徒言行録3:25

ここでペテロは、地上のすべての家族を祝福するという神のアブラハムへの約束が、すべてのものの「回復」によって成就されると説明している。神が父アブラハムへの約束を誓いをもって確認されたことは知られているが、ペテロはさらに、神がすべての聖なる預言者たちの証言によってもそれを確認されたと告げている。

回復とは以前の状態への復元を意味し、人々に回復される最も重要なものは命である。最初の両親は神の律法に背いたため、永遠に生きる特権を失い、その子孫は不完全で死すべき者として生まれました。それ以来、罪と死は地上に君臨し続け、あらゆる国々の民に計り知れない悲しみと苦しみを招いてきました。

預言者ダビデはこの長い人間の苦しみの時代を「夜泣き」と表現しました。しかし神の預言者として、ダビデは「朝には喜びが来る」という福音も加えています。（詩篇30:5）。つまり、罪と死の災いは永遠に続くわけではない。

神の聖なる預言者であるイザヤは、未来の「回復の時」を、世界の住民がもはや病を訴えない日として描いた（イザヤ33:24）。またイザヤは、その時盲人の目が開かれ、聾者の耳が開かれるとも記した。（イザヤ35:5）。さらに彼は、人々が家を建てて住み、ぶどう畑を植えてその実を食べると記した。イザヤ65:21,22

まことに、イスラエルと世界の未来は輝かしい。地は主の栄光で満たされる。（ハバクク2:14）。もはや戦争も、戦争の恐れもなくなる。すべての人々が自分のぶどうの木といちじくの木の下に住むという預言が象徴するように、経済的にも文化的にも安全が保障される。ミカ書4:1-4

その世界政府の統治がもたらす究極の栄光ある結果は、神と人との間、そして人と人との間に平和が実現し、創造主の正しい律法が全人類によって尊重され従われることである。預言者ダビデはこのことを雄弁に予言した。引用しよう：

「地は真実を芽生えさせ、天は義を微笑みかける。主は恵みを注ぎ、わが地は豊かな実りを生む。義は主の先駆けとして進み、その歩みの道を整える。」（詩篇85:11-13）